

学生の学習時間及び課外活動の実態調査とその分析

Survey and Analysis on Study Hours and Club Activities for Students in College Life

渡辺 博・芥川 一則*

福島工業高等専門学校、電気工学科

*福島工業高等専門学校、コミュニケーション情報学科

Hiroshi Watanabe and Kazunori Akutagawa *

Fukushima National College of Technology, Department of Electrical Engineering

*Fukushima National College of Technology, Department of Communication and Information Science

(平成20年9月19日受理)

Fukushima National College of Technology was established in April 1962, and has now a total of about a thousand students in five departments of the college, which is composed of Mechanical Engineering, Electrical Engineering, Chemistry and Biochemistry, Civil Engineering, and Communication and Information Science. In order to improve the environment of education and guidance for the students, we surveyed the real state of study hours and club activities for the students in the college in December 2006. This paper presents the results of the survey, including the contents of analysis and discussion about them. The results show that the study hours at home on weekdays are below an hour per day for about 70 percent of the students, and that a half of the students do the club activities and about 70 percent of them belong the sport club.

Key words : real state of study hours and club activities, students, college life

1. はじめに

近年、小・中学校におけるゆとり教育の導入とそれに伴う学習内容の削減の影響で、高専入学時の学生の基礎学力の低下が指摘され、高専入学後にこれらの学生の学力をいかに高めていくかが、その後の教育指導を進める上での大きな課題となっている。

本校では、入学後の学生の学力向上のため、FD活動等を含む教員の授業面での継続的な改善の努力がなされている。しかし、教員側のこのような努力のみでは、この状況の打開策として十分ではない。学生自身にも、それに呼応した地道で且つ日常的な自学自習の勉学努力が求められる。

本校教務委員会では、平成18年12月、本校における今後の学生の教育指導等の在り方の参考に資するため、準学士課程の全学生を対象とする「学生の学習時間及び課外活動等に関するアンケート調査」を実施した。個々の学生が普段どのような学校生活を送り、また毎日の学習時間や課外活動の実態がどのようになっ

ているかを調査分析し、それらの結果を今後の学生の教育指導等の改善に有効に活かそうとするものである。

従来、このような高専学生の日常的な生活実態に関する調査研究の報告としては、寮生活¹⁾や車両通学²⁾、ライフスタイル³⁾及び早朝登校指導⁴⁾等に関するものがこれまで報告されているが、日常的な学生の学習時間や課外活動等の実態を調査分析した例はあまり見当たらない。

本文では、今回行った学生の学習時間及び課外活動等に関するアンケート調査の概要とその集計及び分析の結果を明らかにし、今後の学生の教育指導の在り方等について検討考察した結果について述べる。

2. 本校の沿革と概況

福島高専は、高専の第一期校として昭和37年4月に設立された。本校は、設立当初は機械工学科、電気工学科及び工業化学科の3学科であったが、昭和41年4月に土木工学科が新設され、さらに平成6年4月

に情報技術を活用したコミュニケーション科学と技術に関する教育と研究を行う新しい文系学科のコミュニケーション情報学科が設置され、5学科体制となった。また、平成7年から8年にかけて土木工学科が建設環境工学科に、また工業化学科が物質工学科へとそれぞれ改組された。本校は、その後の平成15年度までは5学科体制であったが、平成16年4月に「機械・電気システム工学専攻」、「物質・環境システム工学専攻」及び「ビジネスコミュニケーション学専攻」の3専攻から成る専攻科が設置された。これにより、それ後の本校は、工学系4学科と文系（ビジネス系）1学科から成る準学士課程と上記3専攻の専攻科課程を併せ持つ5学科3専攻体制の高等教育機関として現在に至っている。平成18年12月現在の本校準学士課程の学生数を表1に、また通学生と寮生の数を表2に示す。表示のごとく、本校の学生数は5学科で計1,022名、そのうち女子学生が約3割を占めており、また通学生と寮生の数の比率は約4対1となっている。

本校は、「広く豊かな教養と人間力の育成」、「科学技術の基礎的素養と創造性及び実践性の育成」及び「固

有の才能の展開と国際的視野及びコミュニケーション能力の育成」を教育理念とし、工学系4学科では「十分な基礎学力の上に専門知識を修得し、知識創造の時代に柔軟に対応できる技術者」、「モノづくりと環境保全の調和に配慮できる技術者」及び「外国語能力を備え、ビジネス系の知識も獲得した実践的技術者」の育成、またコミュニケーション情報学科では「管理能力を持ったビジネス系職業人」、「国際社会に対応したビジネスコミュニケーション能力を持った職業人」及び「情報技術を備え、工学的知識も獲得した実践的職業人」の育成にそれぞれ当たってきた。特に、準学士課程ではモノづくりのための実験・実習を重視した早期実践教育を、また専攻科課程では本校の特徴である工学系とビジネス系の専攻を併せ持つ利点を十分に生かし、従来の専門分野の枠を越えた工学系・ビジネス系融合のシナジー（協働）教育のカリキュラムの下で「経営のわかる実践的技術プロフェッショナル」及び「技術のわかる実践的ビジネスプロフェッショナル」の育成を目指した創造的且つ実践的な教育を行っており、教育研究の更なる充実とその高度化に努めている。

表1 本校の学生数

(準学士課程) (平成18年12月1日現在)

学年	1年	2年	3年	4年	5年	合計
機械工学科	43 (1)	43	38	40	39 (1)	203 (2)
電気工学科	43 (1)	42 (2)	41 (3)	40 (1)	41 (1)	207 (8)
物質工学科	42 (16)	44 (18)	42 (16)	42 (21)	40 (18)	210 (89)
建設環境工学科	42 (10)	41 (11)	38 (16)	38 (10)	36 (13)	195 (60)
コミュニケーション情報学科	41 (26)	40 (26)	41 (33)	41 (37)	44 (32)	207 (154)
合計	211 (54)	210 (57)	200 (68)	201 (69)	200 (65)	1,022 (313)

(注) () 内は女子数を示す。

表2 本校の通学生と寮生の数

(平成18年12月1日現在)

学年	1年	2年	3年	4年	5年	合計
通学生	160 (43)	167 (54)	165 (55)	167 (56)	167 (50)	826 (258)
寮生	51 (11)	43 (3)	35 (13)	34 (13)	33 (15)	196 (55)
合計	211 (54)	210 (57)	200 (68)	201 (69)	200 (65)	1,022 (313)

(注) () 内は女子数を示す。

3. 学生アンケート調査の実施

3.1 実施方法

教務委員会がアンケート用紙を作成し、学級担任が特別活動等の時間を利用して調査を実施した。その実施期間と実施方法等は、以下のとおりである。

1. 期 間 平成18年12月1日～12月8日
2. 方 法 各学級担任が用紙を配布回収
3. 対 象 全学生（男子709名、女子313名）
4. その他 無記名、学年・学科・性別のみ記入

3.2 調査内容及び集計結果

今回のアンケートには、表3に示すごとく在籍者1,022名中971名が回答し、全体の回答率は95%であった。そのうち男子が709名中667名、女子は313名中299名が回答し、性別の未記載の者が5名あった。以下に、アンケートの調査項目及び集計結果を示す。

表3 回答者内訳

	1年	2年	3年	4年	5年	計
機械工学科	40	43	33	36	35	187
電気工学科	41	41	41	38	40	201
物質工学科	41	43	42	41	27	194
建設環境工学科	38	38	38	38	36	188
コミュニケーション情報学科	40	39	41	38	43	201
計	200	204	195	191	181	971

[1] 通学方法及び通学時間等について

A. 通学方法（有効回答 971名、複数回答可）	
1. 徒歩（447名）	46.0%
2. 電車（329名）	33.9%
3. バス（482名）	49.6%
4. 自転車（323名）	33.3%
5. 原付（許可車両）（34名）	3.5%
6. 自動車（許可車両）（38名）	3.9%
7. 自動車（送迎車両）（255名）	26.3%
8. その他（4名）	0.4%
B. 通学時間（有効回答 965名）	
1. 30分未満（446名）	46.2%
2. 30分～1時間（338名）	35.0%
3. 1時間～1時間30分（160名）	16.6%
4. 1時間30分～2時間（16名）	1.7%
5. 2時間以上（5名）	0.5%
C. 登校時間（有効回答 954名）	
1. 6:30～7:00（14名）	1.5%
2. 7:00～7:30（61名）	6.4%
3. 7:30～8:00（169名）	17.7%
4. 8:00～8:30（645名）	67.6%
5. 8:30～（65名）	6.8%
D. 下校時間（有効回答 954名）	
1. 16:00～17:00（269名）	28.2%
2. 17:00～18:00（297名）	31.2%
3. 18:00～19:00（175名）	18.3%
4. 19:00～20:00（166名）	17.4%
5. 20:00～（47名）	4.9%

[2] 学習時間について

A. 学習時間①（通常授業日放課後の学校での平均的 自学自習時間）（有効回答 968名）	
1. 1時間未満（869名）	89.8%
2. 1時間～2時間（80名）	8.3%
3. 2時間～3時間（10名）	1.0%
4. 3時間以上（9名）	0.9%
B. 学習時間②（通常授業日帰宅後の自宅での平均的 自学自習時間）（有効回答 969名）	
1. 1時間未満（658名）	67.9%
2. 1時間～2時間（250名）	25.8%
3. 2時間～3時間（50名）	5.2%
4. 3時間～4時間（8名）	0.8%
5. 4時間以上（3名）	0.3%

C. 学習時間③（定期試験期間中の学校での平均的
自学自習時間）（有効回答 965名）

1. 1時間未満（428名）	44.3%
2. 1時間～2時間（282名）	29.2%
3. 2時間～3時間（152名）	15.8%
4. 3時間以上（103名）	10.7%

D. 学習時間④（定期試験期間中の自宅での平均的
自学自習時間）（有効回答 963名）

1. 1時間未満（101名）	10.5%
2. 1時間～2時間（153名）	15.9%
3. 2時間～3時間（283名）	29.4%
4. 3時間～4時間（206名）	21.4%
5. 4時間～5時間（90名）	9.3%
6. 5時間以上（130名）	13.5%

[3] 課外活動について

A. 所属クラブの有無（有効回答 962名）

1. 有り（499名）	51.9%
2. 無し（463名）	48.1%

B. 所属クラブ有りの場合（有効回答 499名、複数
回答可）

1. 運動部（346名）	69.3%
2. 文化部（69名）	13.8%
3. 愛好会（83名）	16.6%
4. 研究部（34名）	6.8%
5. その他（8名）	1.6%

C. 活動時間①（通常授業日放課後の所属クラブでの
平均的活動時間）（有効回答 491名）

1. 1時間未満（109名）	22.2%
2. 1時間～2時間（190名）	38.7%
3. 2時間～3時間（157名）	32.0%
4. 3時間以上（35名）	7.1%

D. 活動時間②（土曜日・日曜日・祝日の所属クラブ
での平均的活動時間）（有効回答 495名）

1. 1時間～2時間（156名）	31.5%
2. 2時間～3時間（93名）	18.8%
3. 3時間以上（108名）	21.8%
4. 4時間以上（138名）	27.9%

3.3 調査結果の分析及び検討考察

前述の「[1] 通学方法及び通学時間等について」では、親の車による送迎で通学している学生が計 255名と学生全体の約 4分の1に及んでいることが明らかと

なった。また、通学時間については全体の約 80%の学生が 1 時間以内であり、登校時間に関しては 90%以上の学生が定められた 8 時 30 分までに登校していることが分かった。8 時までに登校する学生が全体の約 25%程度いる反面、約 7%の学生が日常的に遅刻をしている実態が明らかとなった。一方、放課後の帰宅時間については、19 時以降に下校する者が全体の約 23%程度おり、そのうち僅かではあるが 12 時間以上すなわち一日の約半分以上の時間を学校で過ごす者があることも明らかとなった。登校拒否症的な学生がいる反面、学校依存症的な学生も若干いることが分かった。

次に、「[2] 学習時間について」では、放課後に学校で 1 時間以上自学自習している学生が約 10%程度いることや、家庭での学習時間が 1 時間未満の者が約 70%近くもいることが分かった。今後、高専の教育カリキュラムに自学自習を含む 45 時間の学修を 1 単位とする「学修単位科目」が導入される状況の中で、学生の自学自習に対する重要性の認識や態度がまだ十分に浸透していないことが推察される。これに対して、約 6%の学生は帰宅後も毎日 2 時間以上の自宅学習を行っていることが分かった。その一方で、定期試験期間中であっても自宅での学習時間が 1 時間未満の者が約 10%も存在することが明らかとなった。これらの学生は、学習意欲を半ば喪失し、定期試験に対する取組意欲も失っているように見受けられ、今後早急に個々の学生に対して個別に学習指導の機会を設けるなどの何らかの対策が必要と考えられる。一方これに対して、全体の約半数に近い学生については、定期試験期間中に自宅で 3 時間以上の自学自習を行っていることが分かった。さらにまた、その試験期間中は約 25%以上の学生が、学校で 2 時間以上自学自習している実態も明らかとなった。これについては次章でも考察するが、学生からの聴取結果によれば、自宅においては家庭内でのテレビやゲーム等の誘惑に陥りやすいという自分を自覚しての自律的な行動と考えることもできる。

次に「[3] 課外活動について」では、全体の約半数の学生が何らかの形でクラブ活動を行っており、そのうちの約 70%の学生が運動部に所属していることが分かった。所属クラブでの平日の活動時間は、約 75%の学生が 1 時間以上であるが、そのうち 3 時間以上活動している学生も 7%程度見受けられる。土・日及び祝祭日のいわゆる休日での活動時間は約半数の者が 3 時間以上であり、これらの学生は休日の午前中や午後のいわゆる半日以上をクラブ活動に費やしていることになる。これらの点を考慮すると、休日も含めてほぼ毎日学校に出てきている学生がかなりいると考えられる。

表 4 は、通常授業日放課後の学校での学生の平均的自学自習時間を示す。学習時間が 1 時間未満の者は約 90%となっている。学年が上がるにつれて自学自習時間に若干ながら増加傾向が見られる。表 5 は、通常授業日帰宅後の自宅での平均的自学自習時間を示す。学習時間が 1 時間未満の者は約 70%となっている。これについては、表 4 の場合とは逆に、高学年になるにつれて学習時間に若干の減少傾向が見られる。

学習時間が 3 時間以上の学生の割合は学年を通してあまり変化が見られず、約 1%程度である。また、自宅での学習時間が 2 時間以上と回答した者の割合が高いのは 1 年生、4 年生そして 3 年生の順となっている。1 年生は、入学以後の緊張感も手伝って学習時間が長くなっているとも考えられる。4 年生は、専門科目が 3 年生の時と比べて格段に多くなり、それに伴ってレポート等の提出物が増えてくるためと考えられる。なお本校においては、3 年次に学級担任が一般教科教員から専門学科教員に代わるため、3 年生ではそれに伴う学生の意識の変化や卒業後の進路選択等に向けての目的意識が出てくるため、それに伴って学習時間が増えているものと推察される。

表 4 通常授業日放課後の学校での平均的自学自習時間

	1 時間 未満	1 時間 ～2 時間	2 時間 ～3 時間	3 時間 以上
1 年	90.4%	9.1%	0.0%	0.5%
2 年	95.6%	3.9%	0.5%	0.0%
3 年	89.2%	7.2%	2.1%	1.5%
4 年	91.0%	7.4%	0.0%	1.6%
5 年	81.7%	14.4%	2.8%	1.1%
合計	89.8%	8.3%	1.0%	0.9%

(注) 各学年の有効回答：1 年 198 名、2 年 204 名、3 年 195 名、4 年 190 名、5 年 181 名)

表 5 通常授業日帰宅後の自宅での平均的自学自習時間

	1 時間 未満	1 時間 ～2 時間	2 時間 ～3 時間	3 時間 ～4 時間	4 時間 以上
1 年	50.3%	39.2%	9.5%	1.0%	0.0%
2 年	72.8%	23.2%	3.0%	0.5%	0.5%
3 年	63.5%	25.1%	5.9%	1.0%	0.5%
4 年	66.1%	26.2%	6.2%	1.0%	0.5%
5 年	77.9%	16.0%	4.4%	1.1%	0.6%
合計	67.9%	25.8%	5.2%	0.8%	0.3%

(注) 各学年の有効回答：1 年 199 名、2 年 203 名、3 年 195 名、4 年 191 名、5 年 181 名)

4. あとがき

本校準学士課程の全学生対象に行った今回のアンケート調査の結果から、本校における学生の学習時間や課外活動等の実態が明らかとなった。これらの調査結果の分析やその検討考察から、教務委員会を中心とするいわゆる指導する側の教員と一方指導される側の学生との間には、自学自習への取組姿勢やその認識及び態度等にかかなりのずれがあるように見受けられる。今回の調査結果に示されるごとく、全体の約70%に近い学生の自宅での学習時間が1時間未満であったことは、今後の学生への自学自習の指導強化と学力向上を図る上で大きな問題点であると考えられる。さらに、今回の調査結果にも見られた一般的事実として、定期試験期間中は一時的に学生の学習時間が長くなる傾向があるが、これは単に試験を乗りきるためのもので、真の実力養成のための学習とは言い難い。この点に関しても、今後学生の意識の変革が重要且つ必要不可欠なものになってくると考えられる。

なお、今回行ったアンケート調査の自由記述の中に「教室は、レポートや自主的な勉強のために土・日や祝日も開放して欲しい。」といった休日の校内施設利用についての強い要望が10件程度あった。これらの要望については、主に学習意欲の高い学生からの率直な意

見として肯定的に受け止めることもできるが、その一方で、前述のごとく最近では学校依存症的な学生も増える傾向にあることから、学校に依存せず自主的に自宅での自学自習ができるように今後教育面での細かな配慮と強い指導も行っていく必要があると考えられる。

最後に、今回のアンケート調査の実施とその取りまとめに当たり、種々の面で熱心なご支援とご協力を頂いた関係各位に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 渡辺 博、芥川一則：寮生活意識調査の実施と寮生指導、論文集「高専教育」第23号、pp.303-308、2000。
- 2) 松本忠雄、上條直秀、服部秀人：車両通学の実態と指導の模索 —アンケート調査を中心に—、論文集「高専教育」第11号、pp.88-96、1988。
- 3) 天野宣敬、佐々木恵一、小原寿幸、森谷健二、河内三奈、佐賀美恵子：高専学生と高校生のライフスタイル調査から見た高専教育の問題点、論文集「高専教育」第27号、pp.603-608、2004。
- 4) 大村 泰：早朝登校指導と朝課外の取り組み、論文集「高専教育」第28号、pp.661-666、2005。